

Title	古代ロシア文語萌芽期における動詞時制・アスペクト体系の研究
Author(s)	服部, 文昭
Citation	(2001)
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/79580
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

古代ロシア文語萌芽期における
動詞時制・アスペクト体系の研究

(研究課題番号 10610512)

平成10年度～平成12年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

平成13年3月

研究代表者 服 部 文 昭

(京都大学 総合人間学部 助教授)

古代ロシア文語萌芽期における
動詞時制・アスペクト体系の研究

(研究課題番号 10610512)

平成10年度～平成12年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

平成13年 3月

研究代表者 服 部 文 昭

(京都大学 総合人間学部 助教授)

研究組織

研究代表者：服部 文昭（京都大学 総合人間学部 助教授）

研究経費

平成 10 年度	800 千円
平成 11 年度	700 千円
平成 12 年度	800 千円
計	2,300 千円

研究発表

口頭発表：服部 文昭

古代ロシア文語の統語論と語彙の資料としての『アルハンゲリスク福音書』
シンポジウム「スラヴ語学文学研究の最前線 — 国際スラヴィスト会議の研究発表
を中心に —」（主催：創価大学スラヴ東欧研究センター）、

平成 10 年 12 月 4 日

はしがき

この小冊子は、平成 10 年度から平成 12 年度にわたり文部省科学研究費補助金を受けて行われた表題の研究の報告書である。

古代ロシア文語とは何か、あるいは、古ロシア語におけるシンセティックな過去形であるアオリストや未完了過去の変遷など、いずれもすでに多くの研究者が論じながら未だに決着のつかないテーマである。本研究では、先達たるに相応しい研究者の仕事を振り返りながら整理し直すことで、新たな解釈の可能性を探るための準備を行なった。

新たな視点からの研究は、その端緒についたばかりであるが、具体的で文献学的な作業を積み重ねることで先を目指してゆきたい。

2001 年 3 月

服 部 文 昭

目 次

研究組織等	i
はしがき	ii
I 古代ロシア文語とは	1
1 ヴラジーミル大公によるキリスト教国教化と文章語の形成	1
2 スラヴ世界最初の文章語 — 古代教会スラヴ語 — について	2
3 古代ロシア文語研究小史	4
4 古代ロシア文語の実体	9
結び	10
II 古代ロシア文語萌芽期における動詞のアスペクトと時制について	15
はじめに	15
1 ロシア語史の時代区分	15
2 古ロシア語における体	17
3 古ロシア語におけるアオリストと未完了過去	22
4 古代ロシア文語の萌芽期をめぐる研究の可能性	26
結び	31

I

古代ロシア文語とは

1 ヴラジーミル大公によるキリスト教国教化と文章語¹の形成

1-1. 年代記における伝説的な記述をめぐる論議は措くとして、周知のように、9世紀後半、ドニエプル川中流域のキエフを中心とする国家が、最古のロシア国家として誕生した。いわゆるキエフ・ルーシである²。もちろん、これは国家といっても、各地域の部族の都市国家を基盤としたゆるい地域・部族連合といった形であった。それでも、かれらの間に、それなりの社会的・経済的な発展があったことは確かである。

その後、西暦988年（もしくは989年）、キエフ大公ヴラジーミルが東方教会のキリスト教をロシアの国教と定めた。このことは、ロシア史のみならず世界の歴史、なにかんづく文化史のうえで、特筆に価する画期的な出来事であった。これによって、教会関係の文献を中心として、組織的かつ急速に文字の使用が広められたのである。

もちろん、キリスト教の国教化以前から文字が用いられていたことは、疑いの無いことである³。間接的ではあるが重要な証拠として、ルーシがビザンツとの間に結んだ条約がある（最も早いもので907年に条約を結んでいる）⁴。そして、その文字は、いわゆるキリール文字だったことも確かだ⁵。ただし、いずれにせよ、988年以前の幅広い文字の使用については、文献資料が現存しない以上、これ以上の言及はできない。

ヴラジーミル大公によるキリスト教の国教化は、キエフ・ルーシにおける体系的で広範な、本格的文字使用の開始を象徴するものととらえられる。このキリスト教国教化以降のキエフ・ルーシにおいて、現代社会で標準語が果たすのと同じような機能を担っていた言葉を、古代ロシア文語（древнерусский литературный язык）と呼びたい。

1-2. 現代の教養あるロシア人の用いているロシア標準語（ふつうの意味でのロシア語）⁶は、モスクワの方言を母体とするものであるが、その歴史はせいぜい17世紀の後半に始まると言ってよい。実際、標準語の概念は、ある意味で、近・現代社会に特有のものとも思われる。したがって、国民国家成立以前の時期においては、標準語ではなく、筆記語と考えねばならない、とするA. B. Исаченкоの主張にも一理ある⁷。

しかしながら、今日の社会における標準語と完全に同一のものではないにせよ、それぞれの時代の社会の状況に応じて、今日の標準語が担っているのと同じ機能を果たすべき言語が必要とされ、また、存在していただろう事も明らかである。今日の社会の諸条件からすれば、機能的に十分に完成されていないように見えても、別のある時代の社会状況にとっては、それで十分に完成した「標準語」であったとも言える。その時代にはその時代なりの標準語が存在するわけである。

2 スラヴ世界最初の文章語 — 古代教会スラヴ語 — について

2-1. では、その古代ロシア文語とは、具体的にはどのような言葉だったのだろうか。以下、まず、その背景をなす事情から考えてゆきたい。

ヴラジーミル大公によるキリスト教の国教化という象徴的出来事をはさんだ、その前後の時期に、キエフ・ルーシにはどのような文献がもたらされたのか。ビザンツからギリシャ語の文献が相当の分量、直接に請来されたことも確かであろう。だが、圧倒的に多くの文献は、ブルガリアからスラヴ人の言葉で書き記されたものがもたらされたと諸学者の意見は一致している。

当時、写本を集めることは並大抵のことではなかった⁸。国家の威信をかけた事業であった。

ヤロスラフ賢公（在位 1019-1054）は、『原初年代記』の 1037 年のくだりで、「書物に心惹かれ、夜も昼もしばしば本を読んでた。多くの写し手を集め、彼らはギリシャ語からスラヴの言葉に翻訳して、多くの本を書き写した」と記されている。実際に彼の許で仕事してきた写字生は 20 人足らずだとされる。彼が写させたり、あるいは、買ったりして、手にした書物は 500 冊ほどだった⁹。だが、これは、大変なものであった。アルザスのムルバッハ修道院は 870 年ころで 400 冊、イタリアのボッピオ修道院は 10 世紀で 600 冊以上を蔵し、ふつうは、比較的重要な教会で 200 ないし 300 冊の蔵書だった¹⁰、と言われることと比較しても、それはわかる。当時のルーシでは高度情報化が爆発的に進行したのである¹¹。

2-2. キエフ・ルーシにブルガリアからスラヴ人の言葉で記された書物がもたらされたと述べた。この、スラヴ人の言葉について少し説明しなければならない¹²。

西暦 862 年、モラビア¹³（今のチェコの一部）のロスティスラフ侯は、東ローマ皇帝ミカエル 3 世（在位 842-867）に、新たにキリスト教を受け入れたスラヴ人のために「われわれの言語で真のキリスト教の信仰を説き明かすべき」、「主教にして教師たる者を派遣してもらいたい」と要請した。モラビアは当時すでに、西方教会に属するドイツのパッサウ司教区の管轄下であり、ドイツの勢力の浸透を恐れたロスティスラフ侯は、自国の政治的独立を確

保する手段の一つとして、上の要請をしたものと考えられる。いずれにせよ、皇帝ミカエル3世は直ちにこの申し入れを受け入れた。そしてこの大任を果たすべき「教師」として皇帝が選んだのが、コンスタンティノスとその兄のメトディオスであった。

テッサロニケ（マケドニア地方の都市）の人、コンスタンティノスは826年（ないし827年）に、兄はおそらく815年に生まれた。両親は疑いなくギリシャ人で、父は東ローマ帝国の高官であった。7世紀以来、スラヴ人はマケドニア地方へ進出し、テッサロニケの周辺にも多くのスラヴ人¹⁴が住み暮らしていた。したがって、この土地のスラヴ語に精通したテッサロニケ人がいたこと、また、コンスタンティノスとその兄メトディオスの兄弟も幼児からこの土地のスラヴ人の言葉に親しんでいたことは、確実に、皇帝が二人を選び出した理由の一つもまた、そこに有った。

コンスタンティノスの聖者伝によれば、モラビア行きの決定後、直ちに文字を作り、「はじめにことばがあった…」と福音書を訳し始めたことになっている。このことから、当時のスラヴ人はみずからの文字体系を持っていなかったこと、さらに、聖書は、ヨハネ伝1.1に始まる「アブラコス」といわれる典礼用の福音書抜粋を訳し始めたことがわかる。

2-3. しかし、ここで、ひとつ注意すべきは、出発の直前にこれらの仕事を成したとする聖者伝の記述は、きわめて疑わしいということである。コンスタンティノスの考案した文字¹⁵、翻訳に用いた言葉、どちらも近代のスラヴ学者が賞賛を惜しまないきわめて水準の高いものである。いかに天才をもってしても、出発直前の短期間でこれをなすことは不可能である。であるならば、コンスタンティノスは、何らかの理由で、その兄のメトディオスやスラヴ人の弟子たちと協力してかなりの時間をかけて、862年より以前に、ある程度の形に仕上げていたものと考えざるを得ない。兄のメトディオスは、聖者伝によれば、若くして官界に入り、スラヴ人のあらゆる習俗を学ぶために、スラヴ人の住まう西方国境のある州知事に10年あまり任ぜられたということであり、この記述は示唆的である。

2-4. 『スラヴ人の使徒』と称せられる、二人のモラビア伝道は、二人の献身的な努力にもかかわらず、時に利なくして、結局は失敗に終わった。この間、コンスタンティノスは869年に亡くなり、885年には兄のメトディオスも没した。メトディオスの主だった弟子たちは投獄され、拷問を受け国外に追放された。なかには、奴隸として売られてしまった者もあったという。

クロアチアでは、スラヴ語による典礼の運動がコンスタンティノスの死の直前から始まり、その後も、ほそぼそとながらも、その命脈は保たれた。だが、メトディオスの弟子の大部分が逃れたのは、南スラヴ人の強国ブルガリアであった。ブルガリアは、すでにボリス（在位

852-889) 時代から東方教会の傘下に入っていたので、モラビアで結実しなかった兄弟の事業は受け入れられ、大いに発展することとなった。

メトディオスの高弟で、モラビア伝道にも同行し、のちにスラヴ人として最初のブルガリアの主教となったクリメントは、ボリスの意を受けて南西ブルガリアで活動し、7年間で3500 人も弟子を養成した。さらに、ボリスの子のシメオン（在位 893-927）の時代には、プレスラフ（東ブルガリア）の宮廷に多くの聖職者が集まり、盛んに翻訳、著作活動を展開した。

2-5. 以上、やや詳しく述べてきた、コンスタンティノスとその兄のメトディオスによるモラビア伝道のために、テッサロニケ近郊のスラヴ人の言葉に基づいて考案され福音書などの翻訳に使用された言葉を、古代教会スラヴ語と呼んでいる¹⁶。

古代教会スラヴ語は、9世紀から10世紀にかけて、モラビア、ボヘミア、クロアチア、マケドニア、ブルガリア、セルビア、ロシアなどのスラヴ世界の広範囲にわたって用いられた。その結果、時と共に土地土地の言葉と作用し合い、単一性を失った。そこで、多くの研究者は、やや人為的であるが、1100年を下限として定め、それ以降の地方的変種を（「古代」の文字を取って、さらに、地方の名を冠し）クロアチア教会スラヴ語、マケドニア教会スラヴ語、ブルガリア教会スラヴ語、セルビア教会スラヴ語、ロシア教会スラヴ語などと呼ぶようになった¹⁷。

3 古代ロシア文語研究小史

3-1. キエフ・ルーシのごくごく初期にあつては、大公出入りの商人や渡来の外国人が臨時の祐筆のような役割を演じたかもしれない。そして、その際の彼らの用いた言葉と文字は想像の域を出ない。しかし、キリスト教国教化に象徴される時期以降は、キリール文字で表されたロシア教会スラヴ語が古代ロシア文語の機能を果たした。先にも述べたように、まずは、東ブルガリアから古代教会スラヴ語の文献が一気に大量にもたらされた。そもそもの発端は、古代教会スラヴ語の文献であった。しかし、直ちに、土地の話し言葉、活きた東スラヴの日用語、に強く影響を受け始め、1100年以前の段階であっても、もはや古代教会スラヴ語とは呼べぬ言葉に変化した。それが、古代教会スラヴ語のロシア版の地方的変種、すなわち、ロシア教会スラヴ語であった。

古代ロシア文語の実体はロシア教会スラヴ語であった。これは、10世紀から（実際には、文献の現存する11世紀からだ）14世紀まで続く。

上に述べてきたことを一言で要約するものとして、「ロシア文献学の伝統において、ロシア教会スラヴ語と呼ぶと一般に認められているものは、キエフ・ルーシの環境の中で古代教

会スラヴ語の伝統を摂取・消化した結果として形成された、東スラヴ族の文章語¹⁸である」という Г. А. Хабургаев の主張¹⁹を引くことが適切である。さらにまた、「ロシア教会スラヴ語は、まだかなり単純だった家政の用ではなく、(宗教のみならず) 学術や文学を含む文化的必要の役に立っていたゆえに、機能の面で、日々の言葉と対置された、日用語の規範化されたヴァリエーションと認められていた」という彼の見解²⁰自身も、すでに、ロシア文献学の伝統になっていると思われる²¹。

3-2. しかしながら、ここに至るまでには、それなりの経緯も有った。

А. Х. Востоков (1781-1864)、М. А. Максимович (1804-1873)、Ф. И. Буслаев (1818-1897) などの研究者によって、文章語に関する実証的な研究は 19 世紀から本格的に始まった。

И. И. Срезневский (1812-1880) によれば、「ロシア民族がキリスト教に入信したときには、すでに、母語とほとんど異なる言語で記された、信仰のために必要な全ての文献を見出した。これらの書物がロシアの文章の土台となった²²」。さらに、民衆の日用語が変化をし発達した結果、「昔からの言葉は、きわめて教養のある書き手のみがそれを用いるほどに、民衆の言葉に対して異なったものになってしまった。… それで、単一の文章語に代わって、二つの文章語が出現した。一方は、昔からのもので、その構造に乱れを知らないままだが、民衆の言葉の影響で本来の姿からほんの少しだけ差異のついたもの。他方は、新たなもので、古代教会スラヴ語と民衆の日用語の混ざり合ったものである²³」。

このような見方、すなわち、キエフ・ルーシのごく早い段階から二つの文章語、あるいは、二つの型・タイプを有する文章語が存在したとする見解は、妥当な考え方として受け入れられていた。もっとも、その二つのものの間の関係、位置づけについては、立場が分かれていた。

3-3. 一方、今世紀初頭、А. А. Шахматов は、古代教会スラヴ語(彼の術語では古代ブルガリア語)の役割りをきわめて重要視した学説を展開した。さらに彼は、「教養人の談話の言語でもある、我が国の今日の標準語は、教会の言語としてロシアに移植された古代ブルガリア語が起源である」²⁴と述べるように、現代ロシア語の標準語も古代教会スラヴ語の直系とした。彼のこの説は一定の支持を受け、外国の В. Unbegaun らの熱心な指示をも得た。

1930 年代にいたって、С. П. Обнорский が、上の説への反論を展開した。彼によればキエフ・ルーシの文章語は、もともと東スラヴ語、この土地の東スラヴ族の日用語、に基づいて成立したとする。翻訳に基づく古代教会スラヴ語はジャンルの的にも限られたものであり、

ロシア語も含めて他のスラヴ語にとっては、かけ離れた存在であったはずである、と指摘する²⁵。"Русская Правда"の言語の分析に基づき、彼は、ロシアの文章語はロシア起源であり、教会スラヴ語との出会いはその後のことであること、教会スラヴ語の要素の浸透の過程が二次的であること、を結論づけた²⁶。しかしながら、С. П. Обнорский のこの考え方は、きわめて偏ったものであった。僅か4点の、しかも後世の写本で伝わる、資料に基づいただけでは、信頼に足る立論は不可能である。そもそも、その僅か4点の資料の選択からして、自分の論点に都合の良いように、明らかな偏りを持っている。

3-4. 古代ロシア文語の実体に関して、А. А. Шахматов は古代教会スラヴ語の果たした役割を特に重視し、一方、С. П. Обнорский は東スラヴ族の日用語の果たした役割をきわめて重視した。いずれにせよ、彼ら二人の説は、一面的でありすぎた。

В. В. Виноградов は次のように述べている。

非常に古い文献の言語の知識が増大するにしたがって、古代ロシア文語の起源に関する Шахматов の考え方の一面性がより本質的に、はっきりと明らかになってきた。В. М. Истрин、Е. Ф. Карский、М. Н. Сперанский らの研究により、Шахматов の見解は本質的な修正を受けた。これらの研究によって、古代ロシア文語の構造における東スラヴ族の日用語の力強く多方面にわたる作用に研究の光が当てられた。こうして、古代ロシア(キエフ・ルーシ)における2つの文章語の併用(двуязычие)という問題が生じた。

しかし、30年代~40年代には、古代ロシア文語の発生の自立性や古代ロシア文語のそもそもの独自性を論証すること、古代ロシア文語における東スラヴ族の日用語の基盤の強さや深さを、翻って、古代教会スラヴ語による付加的特徴の弱さと浅さを、明らかにすることなどの課題によって、古代ロシア(キエフ・ルーシ)における2つの文章語の併用(двуязычие)という問題は影が薄く脇へのけられていたのだった²⁷。

こうして、古代ロシア文語が単一の型であったとは言えず、古代ロシア文語の二つの型、タイプ(В. В. Виноградов の術語)の有ったことが定式化されていった。その二つとは、宗教的な文献に用いられるところの教会スラヴ語タイプと、世俗的文献、とりわけ業務的な文献での、日用語に近い言語のタイプ、の二つである²⁸。

3-5. さらに、20世紀後半の研究から注目すべき点を拾ってみよう。南スラヴと東スラヴに注目しつつ(これは正教圏に注目して、とも言うるが)、Н. И. Толстой は、つとに良く知られた概念図を提案している²⁹。また、彼の主張の特色は、「同起源のダイグロシア」と「異起源のダイグロシア」の区別にある。前者は、南スラヴ、東スラヴ、すなわち、正教圏のスラヴ世界に適應され、後者は、西方教会圏のスラヴ世界に適應される³⁰。しかし、

彼の言う、Древнеславянский литературный язык という概念の導入が、古代教会スラヴ語という概念との関係に基づいて構築された従来の古代ロシア文語に関する学説と本質的な違いを生み出すとは考えられない。

ダイグロシアに関わる議論で、独自の学説を提出した研究者に、Б. А. Успенский がいる。Б. А. Успенский は、ファーガソンの学説を踏まえて古代ロシア文語に関する理論展開をした最初の人と思われるが、彼の主張の要点は以下のようになる。ダイグロシアとは、「二つの異なった言語が、あたかも、一つの言語の如く機能している」ということである。その言語集団に属する者の意識では、一つの言語体系であるのだが、外部の目から見ると、二つの異なった言語に見えるのである。すなわち、1) 文章語を談話の言葉として使用することができない、2) 規範化された談話の言葉の非存在、3) 同一の内容を二つの言語で表した、パラレル・テキストの欠如、といった特徴から、言語集団の構成員にとって、二つの言語は、相補分布をなしており、したがって、一つの言語として機能していると意識されるのである³¹。彼の説の従来の説と異なるところは、「古代ロシア文語は一つであった」という点にある。

3-6. これまでに述べてきた学説を整理すると、以下のようになる。

	文章語	日用語
(1) И. И. Срезневский	二つの文章語 • старославянский язык • смесь старославянского с живым народным	• народный язык
(2) В. В. Виноградов	一つの文章語 (二つのタイプ) • книжно-славянский тип • народно-литературный тип	• живая народная речь
(3) Н. И. Толстой	二つの文章語 • Древнеславянский литературный язык • Древнерусский литературный язык	• Русский народно- разговорный субстрат
(4) Б. А. Успенский	一つの文章語 • церковнославянский язык	• русский язык

従来の説では、文章語の枠内のみで議論が進められており、二言語併用と言っても、それはあくまで、文章語としてのそれであった。当時のルーシの言語全体を考えれば、すなわち、日用語までも考慮すれば、3言語あるいはそれ以上の多言語の併用社会と見えるはずである。Б. А. Успенский は、はじめから全ルーシの言語状況を考えて、全体に関して、規範化された言語と、そうでない日用語との相補分布的なダイグロシアを主張したのであった。

3-7. Б. А. Успенский の説で気になる点を検討してみよう。

言語規範の概念、すなわち、言語の正しさの概念は、ダイグロシアの環境下では、文章語と結びつき、そのことは文章語の規範性に何よりよく現れる。反対に、日用語は、同じ環境では、原則的に規範化されない。こうして、文章語は言語意識の中で言語の規範化されたヴァリエーションとして現れてくる。既に述べたように、文章語は、日用語と異なり、正式の教育の過程で表だって身につけるものである。よって、言語集団の中でこの文章語のみが正しい言語として認識され、他方、日用語は規範から逸脱したものと見なされる³²。

この説に従えば、文章語：非文章語の区別は、宗教文献：世俗文献、さらには、文化的：日常的の区別と一致する。しかしながら、一方では、書かれたもの：書かれていないもの、との区別とは一致しない。このような立場からすれば、業務文的な文献は、規範との適合の視点から見て、文章語の枠の外に置かれる。こうして、文章語：非文章語の区別は、規範的：非規範的の区別として考えられ、それゆえ業務文献は、非文章語的、非規範的な文献の枠内に存することとなる。これは、認めがたいことである。なぜなら、Ремнева も述べているように、文法の規範に基づけば、業務文は規範的だからである。ただし、その規範は、文章語のそれとは異なる別の規範、すなわち東スラヴ族の日用語に基づいた規範である。さらに言えば、業務文の言語と、東スラヴ族の日用語とは、同一のものではない。なぜなら、業務文の言語は東スラヴ族の日用語に基づいてはいるが、それから規範化されたものであり、社会的優位性も持っているからである³³。

古代ロシア文語について考察する場合、ただ単に文字で書き記されただけの文書と、文章語で書かれた文献とを区別せねばならないことは、論を待たない。しかし、Б. А. Успенский の定義は、当時のキエフ・ルーシの社会状況を考慮しても、あまりに狭すぎる。

ここでまた、「ロシア文献学の伝統において、ロシア教会スラヴ語と呼ぶと一般に認められているものは、キエフ・ルーシの環境の中で古代教会スラヴ語の伝統を摂取・消化した結果として形成された、東スラヴ族の文章語である」さらにまた、「ロシア教会スラヴ語は、まだかなり単純だった家政の用ではなく、(宗教のみならず) 学術や文学を含む文化的必要の役に立っていたゆえに、機能の面で、日々の言葉と対置された、日用語の規範化されたヴァリエーションと認められていた」という Г. А. Хабургаев の主張を、再度、引くことが

有益であると思われる。

3-8. Н. И. Толстой は、В. В. Виноградов のいうところの народно-литературный тип の文章語の特徴を明確に反映した文献は少数であること、книжно-славянский тип の文章語の影響無しの純粋な姿で現れうる例は稀であることを指摘している³⁴。この指摘は、И. И. Срезневский や、現代の Г. О. Винокур、Б. А. Ларин らの説くところの、この時代の文献の言語の特徴は混淆性にあるという主張と通じるところがある。

混淆は、古代教会スラヴ語と東スラヴ族の日用語の混淆という文章語成立の大きな枠組みにおいても行われ、また、個々の文献作成という小さな枠組みにおいても行われたと考えるべきである。同一文献の中においてさえ、部分部分の内容、文脈に応ずる形で、それはあったと考えるべきである。あらゆるレベルで多層的な混淆があったとすべきである。こういった、異なる諸要素の混合における強弱といった点を考慮すると、名前の付け方はさほど重要ではないが、ダイグロシアというよりも、むしろ、レジスター的に見るほうが、キエフ・ルーシの言語状況には相応しいのではないだろうか。

4 古代ロシア文語の実体

4-1. 冒頭近くの注6で示した現代ロシア語の諸形態にならえば、古ロシア語は次のように考えられる。

	古代ロシア文語 (древнерусский литературный язык)
古ロシア語 (древнерусский язык)	{ (東スラヴ族の) 日用語 (живая восточнославянская речь)

その内部にいくつかの部族的方言を抱え込みながらも、東スラヴ族は、西や南のスラヴ人に比べて、その均質さで際立っていた。後のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人の形成につながる分化が顕著に始まるのは 14 世紀からである。それゆえ、古ロシア語は、東スラヴ語 (восточнославянский язык) とも呼ばれることがある (あるいはさらに、「共通」(обще) を冠することもある)。

キエフ・ルーシは、前にも述べたごとく、国家といっても、各地域の部族の都市国家を基

盤としたゆるい地域・部族連合といった形であった。したがって、それらの部族の言葉の違いによって、たとえば、ノヴゴロド、プスコフ、スモレンスク、ロストフ・スーズダリ、オカ川中流・上流域といった地域の方言が知られていた³⁵。しかし、キエフ大公は諸都市に代官や従士団を遣わし行政の任に当たせしめ、キエフと諸都市との交易も盛んであったことは明らかである。このような場面では、土地の話し言葉でなく、超地域的な筆記語が必要とされ、また、そのような言葉が実際に存在し機能していたことも疑いはない。それが古代ロシア文語（древнерусский литературный язык）であった。

4-2. 古代ロシア文語の実体とは、何であったのだろうか。

ギリシャ語で書かれた経典の翻訳のための最初のスラヴ人の言語としての、その最も純粋な姿において（実際には、再建された姿でしか残っていないが³⁶）、古代教会スラヴ語は、古代ロシア文語ではけしてなかった。キエフ・ルーシの最古期の文献の言語には、古代教会スラヴ語を東スラヴ族の言語状況に適応・翻案させた、かなり明白な諸特徴が存在する。加えて、その最初の時期から、この言語の利用範囲が、祭式のためというこの言語元来の役目をかなり超えた広いものとなっていた。当時の学者たちは、この言語が東スラヴ族の土地に來た初めから、教会文献のみならず世俗の文献の作成にも用い始めていた。そして、それらの文献の言語は、古代教会スラヴ語でも、古代ブルガリア語でもなかった。言語の系統的に、同じスラヴ諸語に属するという関係だけであった。それゆえ、古代教会スラヴ語と古代ロシア文語とを安易に同一視することは正しくないのである³⁷。一方でまた、東スラヴ族の日用語も、古代ロシア文語では有り得なかった³⁸。したがって、現在のところ、「古代ロシア文語とは、すなわち、ロシア教会スラヴ語である」と考えておくのが最も適当である。

4-3. この際、常に忘れてならない点は、古代ロシア文語には、レジスター的な使用相が存在するということである。そして、それは В. В. Виноградов のいうところの книжно-славянский тип と народно-литературный тип の文章語という二つの型ではなく、たとえば、教会関係の文献、業務文の文献、（業務文以外の）世俗文献というように、少なくとも、3つ以上の相であると考えられる³⁹。

結び

今は、文章語の起源と歴史の問題はまだ未解決のままであり、この問題の特徴を明らかにするためには文献資料の量が不足していること、文章語の性格付けに用いられている文法的規範、つまり、形態論や統語論の資料はごく僅かであること、を認めざるを得ない⁴⁰。さらに、「キエフ・ルーシの文章語の性格についての問題を完全に解決することは不可能である。

なぜなら、世俗的内容の文献の原典が現存していないし、全ての教会スラヴ語の文献とそれらの XV - XVII 世紀の写本の完全な記述がないからである。したがって、誰一人、東スラヴ族の日用語の特性について正確に再現することはできない⁴¹」という E. Г. Ковалевская の言葉もまた事実である。

古代ロシア文語について、今のところは、上に述べた以上の一般化は余り意味が無いだろう。しかしながら、全体的な枠組み、大きな視点から見た図式は、本稿で述べてきたところで誤りはないと思われる。したがって、その俯瞰的な概念を常に頭に置きつつ、しばらくは、むしろ個々の文献の言語の個別的な研究に向かったほうが良いとも言えよう。

注

¹ литературный язык, книжный язык, книжно-литературный язык、どれも「標準語」としても、もちろんかまわないのだが、この時代に関しては、「文章語」としておきたい。後述。

² スラヴ人は、その言語の諸特徴と地理的分布に基づいて、西スラヴ、南スラヴ、東スラヴの3グループに分類される。キエフ・ルーシを築いた人々は東スラヴ人であった。この東スラヴ人が、後に、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人に別れるのだが、その分化が顕著に始まるのは14世紀からである。

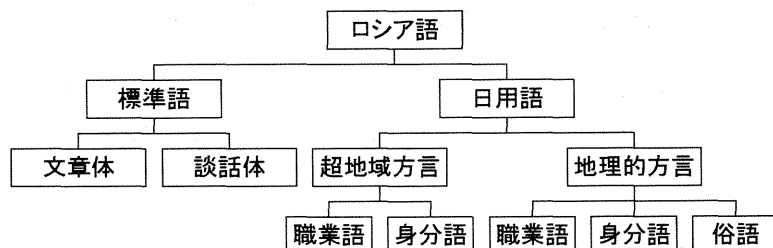
³ 国教化以前に既に、キエフ・ルーシにおいて、ある程度はキリスト教が広まっていたことは、年代記の記述をたとえ鵜呑みにせずにしても、疑いが無い。

⁴ もっとも、ルーシ側の文字使用は、おそらく受動的なものであって、自発的、制度的なものではなかったろう。たとえば『原初年代記』の945年のくだりからも、そのことは窺い知ることができる。

⁵ グニョーズドヴォ (Гнёздово、スモレンスクの南郊) 古墳群から発見された壺の文字列 (10世紀中葉と推定される) からわかる [Устинов 1959, 21]。

それ以前にも、交易のためなどでギリシャ商人、イスラム商人、さらにはフランク、ノルマン、ハザールなど多くの人々が東スラヴの族長の許を訪れ、中には祐筆のような仕事に携わった者もいたと思われる。彼らが、その場その場で、ギリシャ文字、ラテン文字、あるいは、ルーン文字等々を用いたことも想像に難くはないが、現在のところ、それらはもはや推測の域を出ない話である。

⁶ たとえば、Ковалевская [1992, 12] やモーザー [1967, 15] の術語を参考にして、現代ロシア語のヴァリエーションを模式的に表せば以下のようなになる。



このように、言語は、単体の均質の存在というよりも、いくつかの体系の集合体と考えるべきものである。それぞれの術語は異なるにせよ、Л. В. Щерба 以来、広く言われていることである。また、これを、レジスター (register)、(言語) 使用域と呼んでもかまわ

ないが、ここではとくに術語にはこだわらないで、そのような概念の存在だけに注目しておく。また、ここでは、標準語 (литературный язык) とは、ある国民によって公共の場、マスコミ、学校教育などで使用されるべき、規範的で洗練された言語である、ぐらいに考えておきたい。今のところ最も完全なものを見なされている、В. В. Виноградов の定義は以下のようである。

Литературный язык — общий язык письменности того или иного народа, а иногда нескольких народов — язык официально-деловых документов, школьного обучения, письменно-бытового общения, науки, публицистики, художественной литературы, всех проявлений культуры, выражающихся в словесной форме, чаще письменной, но иногда и в устной. Вот почему различаются письменно-книжная и устно-разговорная формы литературного языка, возникновение, соотношение и взаимодействие которых подчинены определенным историческим закономерностям. [Виноградов 1978, 288]。

⁷ たとえば、モーザー [1967, 15] も参照。詳しくは、[Виноградов 1978, 81 および 107] 参照。

⁸ たとえば、ヴォルフ [2000, 56~66] を参照。

⁹ Сапунов [1978, 141]。

¹⁰ ヴォルフ [2000, 66]。

¹¹ Сапунов [1978, 13]。

¹² 以下、木村 [1985, 17~25] の祖述である。

¹³ 西スラヴ人の国家であった。

¹⁴ 南スラヴ諸語に分類されるべき言葉を持つスラヴ人であった。

¹⁵ コンスタンティノスの考案した文字はグラゴール文字と呼ばれる。スラヴ語の表記に適するように良く工夫された、また、独創的なデザインの字体である。一方、後に、おそらくは東ブルガリアで考案された、明らかにギリシャ文字に基づいたアルファベットが、キリール文字と呼ばれる。

キリール文字は、ギリシャ文字に基づいているが、スラヴ語を書き表す際にそれでは不都合な点がいくつか有り、そのような場合には、先に作られたグラゴール文字を踏まえた工夫をしている。古代教会スラヴ語 (後述) の文献中で、キリール文字で書き記されたものは、より遅い時代のものである。

¹⁶ 言語学的には、西、南、東と3つに分類されるスラヴ諸語の中で、古代教会スラヴ語は南スラヴ諸語の一つとされる。

この言葉の名称は古代教会スラヴ語 (Old Church Slavonic) の他に、古代スラヴ語 (vieux slave, старославянский язык)、また、先に述べた経緯から、古代ブルガリア語と呼ばれることもある。しかし、「現代ブルガリア語が古代教会スラヴ語の直系か否かが疑問である上に、古代スラヴ語は余り漠然としていて、恰もスラヴ語派の中間共通基語を意味する如くであるから、共に適当な名称ではない」との指摘のように、古代教会スラヴ語という名称が的確である [高津, 18]。

¹⁷ 古代教会スラヴ語の現存する資料としては、コンスタンティノスとその兄メトディオス時代のものは何一つ残っていない。兄弟から100年以上を経た、10世紀以降の写本が伝わるのみである。それらは、ごく少数が10世紀に、残りは11世紀に主としてマケドニアとブルガリアで作成されたと推定されている。

なお、ロシアで写された写本は、11世紀のものでも、土地の言葉の影響が強いとして、古代教会スラヴ語の文献とは認めないことが慣習となっている。

¹⁸ литературный язык、книжный язык、книжно-литературный язык、どれも「標準語」としても、もちろんかまわないのだが、この時代に関しては、「文章語」としておきたい。注

7 も参照。

¹⁹ [Хабургаев, 20]。

²⁰ 同書、12 ページ。

²¹ [Ремнева, 18] の指摘に同感である。

²² [Срезневский, 37]。

²³ 同書、67-68。

²⁴ [Шахматов, 19]。

²⁵ [Обнорский, 5]。

²⁶ 同書、6。

²⁷ [Виноградов, 71-72]。彼自身の見解も時と共に変化していた（彼の選集6頁以下の Н. И. Толстой の解説を参照）。だが、1960 年代までには固まっていたと見て良いだろうし、あるいは、そうでなくても、本稿で以下に述べる点からは、本質的な影響はない。

²⁸ 現存している文献に関しては、[Дурново] が最も良い情報を与えてくれる。

²⁹ たとえば、[Толстой, 1988, 40]。

³⁰ 同書、23-24。

³¹ [Успенский, 6-7]。

³² [Успенский, 6]。

³³ [Ремнева, 23-24]。

³⁴ [Толстой, 1988, 39]。

³⁵ たとえば、[Букатевич, 46] など参照。

³⁶ 注 17 を参照。

³⁷ たとえば、[Хабургаев, 12]、[Ремнева, 18-19] を参照。

³⁸ たとえば、「中世の東スラヴ人の文章語は、土地の日用語の任意のヴァリエーションが規範化された結果として形成されたのではなく」という指摘のように [Горшкова, Хабургаев, 10]。

³⁹ [Ковалевская, 35]。

⁴⁰ [Ремнева, 26]。

⁴¹ [Ковалевская, 35]。

参考文献

Букатевич Н. И. и др. Историческая грамматика русского языка. Киев, 1974.

Виноградов В. В. Избранные труды. История русского литературного языка. М., 1978.

Виноградов В. В. Очерки по истории русского литературного языка XVII - XIX веков. 3-е изд. М., 1982.

Винокур Г. О. Избранные работы по русскому языку. М., 1959.

Горшкова К. В., Хабургаев Г. А. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд., испр. М., 1997.

Древнерусская грамматика XII - XIII вв. М., 1995.

Древнерусский литературный язык в его отношении к старославянскому. М., 1987.

-
- Дурново Н. Н. Введение в историю русского языка. Впо, 1927.
- Иванов В. В. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд., испр. и доп. М., 1983.
- Историческая грамматика русского языка: Морфология. Глагол. М., 1982.
- Ковалевская Е. Г. История русского литературного языка. 2-е изд., перераб. М., 1992.
- Лаврентьевская летопись. Полное собрание русских летописей. Том первый. М., 1997.
- Ларин Б. А. Лекция по истории русского литературного языка (X - середина XVIII в.). М., 1975.
- Литературный язык Древней Руси // Проблемы исторического языкознания. Вып. 3. Л., 1986.
- Обнорский С. П. Очерки по истории русского литературного языка старшего периода. М.; Л., 1946.
- Ремнева М. Л. История русского литературного языка. М., 1995.
- Сапунов Б. В. Книга в России в XI - XIII вв. Л., 1978.
- Соболевский А. И. История русского литературного языка. Л., 1980.
- Срезневский И. И. Мысли об истории русского языка. М., 1959.
- Толстой Н. И. История и структура славянских литературных языков. М., 1988.
- Толстой Н. И. Избранные труды, том II: Славянская литературно-языковая ситуация. М., 1998.
- Успенский Б. А. Краткий очерк истории русского литературного языка (XI - XIX вв.). М., 1994.
- Устинов И. В. Очерки по русскому языку, ч. 1. М., 1959.
- Хабургаев Г. А. Старославянский церковнославянский русский литературный // История русского языка в древнейший период. М., 1984.
- Шахматов А. А. Очерк современного русского литературного языка. М., 1923.
- Щерба Л. В. Избранные работы по русскому языку. М., 1957.
- フィリップ・ヴォルフ 『ヨーロッパの知的覚醒』、白水社、2000。
- 木村 彰一 『古代教会スラブ語入門』、白水社、1985。
- 高津 春繁 『印欧語比較文法』、岩波書店、1954。
- Н. Мозер 『ドイツ語の歴史』、白水社、1967。

II

古代ロシア文語萌芽期における

動詞のアスペクトと時制について

はじめに

ロシア語を含むスラヴ諸語は、(同じくインド・ヨーロッパ語族に属する) いわゆる英語やフランス語、ドイツ語に比較して、今日においてもなお、その形態的な豊かさに際立っている。それでも現代のロシア語は、かつてのロシア語と比べれば、形態的にかなり簡素化された姿になっている。

仮に、ロシア語史の歴史時代が 10 世紀の末に始まるとすれば、現代までにちょうど千年あまりを経たことになる。誤解を恐れずに敢えて一言で言えば、ロシア語史の歴史は「簡略化」の流れの中に有ったと言えよう。名詞や形容詞なども、もちろん変化をした。だが、最も大きな変わり方をしたものは動詞ではなかったか。中でも特に過去時制において、最も顕著にその変化が見られると思う。

たとえば、12 世紀の文献に現れる過去時制を見てみると、そこでは、アオリスト (аорист)、未完了過去 (имперфект)、完了 (перфект)、過去完了 (плюсквамперфект) の 4 つの形態が用いられていた。これらは、それぞれ、人称と数によって語形変化をおこなった。現代ロシア語の過去形が一つの形式しか持たず、しかも、性 (人称ではなく) と数で変化するのは、大いに異なっている。

この 4 つの過去形は、スラヴ祖語時代から継承されてきたものだが、これら過去形がスラヴ祖語により近い状態だった古代教会スラヴ語と比較して、古ロシア語においては、時として少し異なった、実態としてすでに変貌をした姿で、現れていたとも言われている¹。その辺のところを、特に古代ロシア文語の萌芽期に注目しつつ考えてみるのが本稿の目的である。

1 ロシア語史の時代区分

1-1. 当然のことながら、ある言語は単体の均質の存在というよりも、いくつかの体系の集合と考えるべきものである²。ロシア語も、その内部にいくつかの体系を包含してい

る。そのように考えると、標準語の歴史と非標準語である日用語の歴史とは、必ずしも同じものとはならない。現に、中世の東スラヴ族の文章語は、土地の日用語のある一つのヴァリエーションの規範化の結果として形成されたものではなかった⁴。

それにもかかわらず、また、相対的なものではあるが、全体としてのロシア語史の時代区分を考えておくことは有益である。

ここでは、以下のように考えておきたい⁵。

1. 東スラヴ語 (Восточнославянский язык) の時期、6世紀－9世紀
2. 古ロシア語 (Древнерусский язык) の時期、9世紀－14世紀
3. 古期ロシア語 (Старорусский язык) の時期、14世紀－17世紀
4. 近代ロシア語 (Национальный русский язык: Начальный период его формирования) の時期、17世紀中葉－18世紀
5. 現代ロシア語 (Национальный русский язык: Период его развития) の時期、19世紀以降

印欧語族の一語派であるスラヴ諸語は、その言語的特徴と、地理的分布に基づいて、西南、東の3つのグループに分類される。ロシア語は、そのうちの東群に属している。東スラヴ語 (Восточнославянский язык) の時期 (6世紀－9世紀) は、いわば、ロシア語の「歴史以前」の時期である。この時期には、ロシア語の文献はいまだ存在せず、比較言語学や借用語の研究、また、地名学、歴史学 (他の民族の歴史記録に現れた資料の研究) など、他分野の学問研究に頼らねばならない。

古ロシア語 (Древнерусский язык) の時期 (9世紀－14世紀) は、いわゆる最古のロシア国家であるキエフ・ルーシの成立と共に始まる。この時期には、文献などの文字資料による研究が可能になる。もっとも、9世紀の文献は、今のところ現存してはいないが。

古期ロシア語 (Старорусский язык) の時期 (14世紀－17世紀) は、東スラヴ族が顕著な分裂を開始し、その中から、現在のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人の元になる集団がはっきりと形成されていった時期、モスクワ大公国の興隆の時期、に重なる。

上に述べたことから、ロシア語史の起算点としては、10世紀の末から11世紀の初頭を考える。もっとも、その起算点の時点における文法体系も、現在のところは、「理想的な再建形」の域を出るものではないが。

1－2. 古ロシア語の時期のうち、12世紀から13世紀にかけての時期は、ロシア語史上、音体系の歴史における大転換期であった。12世紀後半から13世紀前半にかけての、弱化母音の脱落という、古ロシア語の音声・音韻体系全体を完全に作り替えてしまった過程を古ロシア語が経たことに、その大転換は起因する。上の過程は、全ての方言で同時に生じたわけ

ではないし、また、弱化母音の弱位置での消失ならびに強位置での完全母音化に関して、等しく進行したわけでもない（ちなみに、完全母音化の現象の方が、消失の現象よりも遅く生じたとされている）。しかし、ロシア語史においては、13 世紀中葉までにはこの過程は古ロシア語の占める全地域において完了したと認められている。

一方、形態論の分野では、この時期は、比較的安定した時期と考えられる。すなわち、多くの古態の特徴、要素を残しつつ、形態論の基本体系の変革はほんの端緒にしかすぎなかった⁶。

古ロシア語期のうちで今述べた時期に先行する、10 世紀末ないし 11 世紀初頭から 11 世紀末ないし 12 世紀初頭にかけてまでの時期を、特に、古代ロシア文語の萌芽期と考えたい。

2 古ロシア語における体

2-1. ロシア語に限らず、スラヴ諸語全体に共通の特徴として、動詞の持つアスペクトのカテゴリーを挙げられる。スラヴ語のアスペクトは、それが文法カテゴリーであるという点が固有の特徴となっている。ロシア語文法で「体（たい）」（вид）と呼ばれるこのカテゴリーについては、語彙的・意味のカテゴリーとしての「動作様相」（способы действия、ドイツ語 Aktionsart）とも関連させつつ、数多くの精緻な研究が積み重ねられてきている。

今日、ロシア語のアスペクト研究の中心的な素材となっているのは、現代の教養あるロシア人の用いているロシア標準語（ふつうの意味でのロシア語）である。この言葉は、モスクワの方言を母体とするものであるが、その歴史はせいぜい 17 世紀の後半に始まると言ってよい。それでは、それ以前のロシアの言葉におけるこの現象はどのようなものであったのだろうか。

2-2. この問題について、今日の伝統的な研究では、以下のように考えられている。

ロシア語の動詞の発達を歴史的に辿る際に、相互に密接に関係するアスペクトと時制のカテゴリーは一緒に検討されねばならない。ロシア語動詞の発達の歴史で、その前史たる最も古い時代（印欧語共通基語のごとき時代）では、時制は無く、アスペクトの区別のみがあったと考えられている。しかし、そこでのアスペクトは、たとえば、継続相、瞬時相、結果相などのような意味を表すものであった。また、それを表す文法手段には、語幹における語根母音の交替、ならびに、動詞のクラスを示す接尾辞が用いられた。したがって、そのアスペクトは、現代ロシア語や他のスラヴ諸語の特徴たる、完了体、不完了体の二項対立に基づく文法カテゴリーとしてのアスペクト、すなわち動詞の体、とは別のものであった。

次の段階は、先の古いアスペクトのカテゴリーに基づいて成立した時制のカテゴリーが存在した時期である。最古の時期からこの時期への移行には極めて長い時間を要した。この時

制のカテゴリーへの転換は、おそらく、印欧語共通基語のごとき古い時代に開始され、スラヴ語などの個々の語派に分かれた後も引き続いて行われたと思われる。

最後に、もっと遅い時代に、完了体、不完了体の対立が確立される。しかしながら、ロシアの最古の文献資料によれば、また、他のスラヴ語のきわめて古い文献によっても、その対立は、現代ロシア語においてわれわれの見るような段階には達していなかった。このことから、スラヴ祖語の時代には、完了体、不完了体の対立は、まだかすかに分かる程度であったと言える。さらにまた、現存する最古の文献でわれわれに伝わるような時期の古ロシア語は、スラヴ祖語に特徴的であったのと同じ、多くの時制形態を持つ体系を反映している。

現存する最古の文献でわれわれに伝わるような古ロシア語の時期においても、上に述べた3つの段階すべてにわたって形成された様々な要素が、あるものは過去の遺物として、あるものは伸びつつあるものとして、まだ存在し相互に作用し合っていた。時制の体系の発達によって断たれたが、しかし完全には消え去ってはいなかった、古いアスペクトの意味も、そのようなものとして作用していた。

こうして、古いアスペクトの区別を保ちながらも、スラヴ諸語では比較的より遅い時代になって（とはいえいまだスラヴ祖語のうちにもある程度は）、新しいアスペクト、すなわち、完了体、不完了体の対立が発達した。完了体、不完了体の区別を示す文法手段は、まず、動詞の接頭辞であった。しかし、現存する最古の文献でわれわれに伝わるような古ロシア語の時期においては、様々な性格の接頭辞が存在しており、すべての接頭辞において体の意味が確立されていたわけではなかった⁷。

2-3. 上に紹介した伝統的な見解に関して、細かな点はさておき、大きな二つの問題点がある。一つは、現代ロシア語の体と古ロシア語のそのようなカテゴリーとの間の関係と、さらに、完了体、不完了体の二項対立に基づくロシア語の体はいつから存在していたのか、の点である。二つ目は、仮に、二項の対立が存在し、あるいは、発生しかけていたとして、その具体的な過程の捕え方についてである。

まず、第一の問題点について考えよう。伝統的な主張に含まれる、現代ロシア語の体の意味と印欧語におけるアスペクト的關係の意味とは同じものではない、という見解については異論が無い。しかしながら、この問題の後半部分、すなわちロシア語の体のようなカテゴリーが、いつから存在していたのかに関しては、説が分かれる。多数の研究者の説くところでは、少なくともスラヴ祖語の遅い時期には完了体、不完了体の対立に基づく体の相関は形成され始め、現代語のような段階ではないにせよ、古ロシア語の極めて早い時期から、体の区別は疑い無く実現していたのだ、ということになる。これに対して、古代教会スラヴ語においてさえ体の対立は完成していたとする主張もある。

それによれば、完了体、不完了体の動詞の体は、スラヴ語動詞に特有のものだが、印欧語のアスペクト的關係に基づいて形成されたと認められている。この古くからのアスペクトの名残は、スラヴ語の動詞で同じ体の動詞の中に見られるような、さまざまな動作の様子を特徴づけるもので、今日の完了体と不完了体の二項対立に基づく文法カテゴリーとしての体と古代のアスペクト的分類との不一致をはっきり映し出している。

完了体と不完了体との二項対立の形成は、スラヴ祖語の分裂以前の時期のことだと認められる。したがって、最古のスラヴ語文献の出現時点では、体の対立は完成していたと見なすべきである。すべての古ロシア語、いや古代教会スラヴ語の動詞でさえ、一義的に体が決まっていた。そして、このことは、けして現代語における体の対立の「押し付け」ではないのだ。スラヴ諸語では、全ての動詞が同じ規則性を持って体のペアの対立に含まれている。このことには、一つの説明しか有り得ない。すなわち、動詞が表す同一の動作・状態の時間における制限の意味 (ограниченность) の有無という対立に現れる、形態論的カテゴリーとしての体は、スラヴ祖語の分裂より以前に完全に出来上がっていたのである。

体の対立に関するすべての現代スラヴ語の共通性、また、体の形成方法の原則的共通性によって、「古ロシア語の出発点となるような文法体系では、体の二項対立はまだ完全ではなく、また、現代語のそれとも一致しない」という、大変に広まっている意見の蓋然性について疑問を持たざるを得ない。体の二項対立は、すでにスラヴ祖語の末期までには、すべてのスラヴ語の話し手に知覚される程度まで発達していたにちがいない。

現代語との相違は、体の対立における一貫性の強弱ではなく、動詞の諸カテゴリーに占める体の意義の不一致にある。現代語では、体と時制とは不可分であるが、古ロシア語では、時制と体とは相対的に独立したものであった。すなわち、体とは、動詞の時制の意味を決定することもなく、ある形態の形成を禁じたりすることもしない、動詞語幹の恒常的特徴であった⁸。

この Горшкова と Хабургаев の主張はいささか過激すぎる。そもそも、「少なくともスラヴ祖語の遅い時期には完了体、不完了体の対立に基づく体の相関は形成され始め、現代語のような段階ではないにせよ、古ロシア語の極めて早い時期から、体の区別は疑い無く実現していた」という主張にせよ、すんなりとは肯けないところがある。「ロシア語動詞の体の体系は、古ロシア語の最古の文献の残る時代までには本質的には完成していた」というのは、先入観ないし強い固定観念である⁹。もちろん、古ロシア語においても、広義のアスペクト的な意味は動詞に見出すことができる。しかし、それらと、現代のスラヴ諸語の特徴となっている、完了体、不完了体の二項の対立に基づく文法的カテゴリーとしての体とは、明確に区別して考えるべきものである。

2-4. 二つ目の問題を検討してみよう。従来からの見解は、古いアスペクト的な意味の併存も認めるが、中心は完了体と不完了体の二項の対立で、その際、接頭辞の付加で完了体が形成されることを第一と考える。これは、現代語の体系とのつながりを重視した説でもある。П. С. Кузнецов は次のように考えている。

もともとは前置詞であったものから生じた動詞接頭辞には、印欧語共通基語の時代にもアスペクト的な役割りを感じられるとする研究者もいるが、スラヴ語におけるほど、その役割りが高まったのは、ごく近いバルト語においてですら、その例を見ない¹⁰。しかしながら、古ロシア語の最古の時期では、動詞接頭辞は、もともとの語彙的な意味を保持し、接頭辞の付加は、新たな意味の動詞は形成するが、それが必ずしも完了体を形成することとはならなかった例が、多く見られた¹¹。

同様の見解を説く研究者は多い。たとえば、Горшкова と Хабургаев がそうである。体による対立の発達、体形成の形態論的手段の安定化を求めた。最近の研究から、その最古の手段は接頭辞の付加だと明らかにできる。これは歴史的には動詞の語形成と密接に結びついている。不完了体の動詞に接頭辞が付くと、完了体化されつつ、かつ、新しい意味、あるいはニュアンス、を持った別の動詞が形成される。動詞の語彙の意味を変更しないもつばら形態論的手段は、接尾辞の付加であった。この方法も古ロシア語でかなり一貫して現れる¹²。

2-5. 一方で、現代における二項の対立とはやや異なった対立、さらに、その対立の形成においても接頭辞ではなくて接尾辞の働きを重視する（したがって、不完了体に注目する）見解も存在する。

Ю. С. Маслов によれば、動作様相に基づいて、動詞は、限界動詞、非限界動詞、（それら特徴を持たない）中立動詞の3群に分けられる¹³。限界動詞には、すべての接頭辞付きの動詞が含まれる。限界動詞の中心をなすのは結果相の動詞である。これは、完了した動作も、継続中の動作も、反復される動作も、みな表せた。たとえば、この動詞の一例である、*sъbъrati という動詞は、結果に向かって継続中の動作も、結果達成そのものも、どちらも表せた。この二つの意味を文法的に区別するために、*sъbirati という形が生みだされた。この形成は、すでにスラヴ祖語に存在していた、(*iznesti: *iznositi のような) 限定動詞と非限定動詞の区別がモデルとなったものだ。ここで非限定動詞 *iznositi は、もつばら反復相を表すのに対し、限定動詞 *iznesti は反復相も非反復相もともに表せた。こうして、*sъbirati という形は、非限定・反復相の意味とともに継続相の意味も発達させた。

その結果、この時期のスラヴ祖語には、不完了体の意味を持つ語彙的に限定された動詞群が形成され始めた。これらが、「通体」動詞⁴と対立していたのだが、やがて、*sъbirati のような例が増大し、継続の意味を独占し、もともとの *sъbъrati を到達の意味だけに押し込め

るようになるにしたがって、「通体」動詞は完了体へと変身した。と同時に、まだ語彙的に限られており発達したものではなかったが（中立動詞や非限界動詞は、いまだ、この対立の埒外にあった）、現代に通ずる体のカテゴリーが形成されるのである¹⁵。

2-6. 最後に、体をめぐる議論のまとめとして、Ю. С. Маслов の説を踏まえ今日の穏当な説と見なせる、В. Б. Силина の説を辿ってみよう。

動詞の体 (вид) は、スラヴ祖語の後期に源を発している。古ロシア語の最初の文献が現れる頃には、動詞の語彙に体の差異を表す明確な体系が存在していた（主として、接頭辞付きの動詞、または接頭辞無しの動詞で限界性 (предельность) の意味を持つもの）。形成されつつあった体の体系の意味的、形態的中心は、不完了体 (имперфективность) のカテゴリーだった¹⁶。まさに他ならぬ体そのものの意味として生じた不完了体の意味、すなわち進行性、みずからの限界に向かって継続する動作の意味は、不完了体のカテゴリーを生み出し補強した根本的な意味だった。12世紀から13世紀の古ロシア語においては、同語根の動詞の様々な対立が存在していた。それは、特殊な性質を帯びてはいたが、体の相関と見なせるものだった。この特殊な性質は、この相関において不完了体の動詞に対して、多少ともはつきりとした完了体性を持っていた動詞が対立するとともに、同時に、「通体」動詞とも意味付けられるような動詞も対立している、という状況に起因する。言い換えれば、対立に含まれる動詞のある部分だけが、体によって特徴づけられていたのである¹⁷。

多くの動詞にとって（主に接頭辞を持たない動詞）、最も本質的な意味的特徴は限界性¹⁸、非限界性によって特徴づけられているままであった。

アスペクト性を持つ、この語彙的・文法的カテゴリーはロシア語史の初期における体・時制関係の発達を多くの点で規定していた。12世紀から13世紀にかけて、このカテゴリーは、語彙的、語形成的、そしておそらく、文法的レベルにも現われ得た。

体の意味、あるいはそれに近い意味は、古ロシア語の時制形態の古くからの意味と密接な相互作用の関係にあった。これら時制形態の古くからの意味を構成するいくつかの要素を持つアスペクト的性質は、対応する体の意味を表す必要がある際には、時制形態の機能に何らかの制限を負わせざるを得なかった。この制限は、体相関各項のパラダイム諸形の相補分布傾向という形で現れた。体の意味の最初の発達は現在-未来形の領域で生じて、過去時制の領域では、体の意味は初めはアオリストと未完了過去の間で分かち合われていた、ということからおそらく体の相関は生じた。この相補分布の傾向は、体の発達の初期において、（主に接頭辞付きの動詞で）不完了体動詞からの時制形態の形成を制限していた。不完了体動詞は、おそらく、現在形、未完了過去形、能動と受動の現在分詞にのみ現れた。相関のもう一方の動詞は、しばしば「通体」動詞のままだったが、現在-未来形という非分析的な性質を

保った。これらはアオリストも持ち、また、能動過去分詞（- въ で終わるもの）、受動過去分詞を持っていた。上述の、相補分布傾向の埒外に、対立の両項ともが有する不定詞、スビヌム、命令法、仮定法、- ль に終わる能動過去分詞があった。それらの選択は文脈によって決まった。接頭辞を持たない動詞では、パラダイム諸形の相補分布傾向はきわめて限られていた。なぜなら、それらは基本的に、体の特徴を有していなかったからである¹⁹。

相補分布は、発展の方向を示す、多少とも一貫して存在する傾向にすぎなかったと強調する必要がある。この傾向から外れることも可能だった。この事情の解明は興味を引く。傾向から外れることは偶然だったのか、それとも体系的特徴を持つのか。もし、後者の場合には、傾向から外れることは、体以前の状態の残存物と見なせるのだろうか。また、それによって、12 世紀、13 世紀のみならず、文献時代以前の体・時制関係の特徴に光が当たるのだろうか。

12 世紀、13 世紀における全ジャンルの文献の研究から、この時期の古ロシア語はもう既に十分に発達した体の区別の体系とその表現手段を持っていたとわかる²⁰。この時期の文献には、体の相関の、実質的には全てのタイプが出ている。それらタイプは文献以前の時期から存在し、文献時代に発達した²¹。

3 古ロシア語におけるアオリストと未完了過去

3-1. 体の問題を概観したのを踏まえて、時制の検討に移るが、後で述べる理由から、ここではアオリストと未完了過去の二つの時制形に限りて検討したい。

Горшкова と Хабургаев によれば、いくらかの音声的、形態的差異を捨象すれば、基本的な形式は古代教会スラヴ語と同じである。語幹の持つ体の意味と関係なく 4 つの時制、すなわち、アオリスト、未完了過去、完了、過去完了であった。ただし、注意すべきことは、いわゆる文章語タイプのテキストにおいてのみ全ての時制形式が出るという点である。法律、手紙、碑文といった業務文では、未完了過去は用いられず、アオリストの使用も過去について述べる際の 11 回から 12 回に 1 回程度だ²²。

アオリストの意味は、瞬時の動作だろうか継続する動作だろうか、個々の局面に分割することができない、それ全体としての過去の出来事、状態を表す。典型例を下に示す。

размысливъ *ре(че)* дружинѣ свои. идѣте съ данью домови. а я возвращюся похожю и еще. *пусти* дружину свою домови. съ маломъ же дружины *возвратиса*. желая больша имѣнья. (Лавр. лет., л. 14 об. 表記は簡略化してある)

(思案して、自分の従士団に言った。「貢物を持って家に帰れ。私は引き返して、なお遠征するであろう」と。自分の従士団を家に帰して、わずかな従士団とともに、さらに多くの財物を望んで、引き返した。)

ここに見るように、アオリストは、現在と結びつくことなく過去において順を追って次々

と継起してゆく出来事の描写に適する。

一方、未完了過去は、間違いなく過去の動作、状態を表すのだが、その動作(状態)そのもの、それ自体に集中せざるを得ない場合に用いられる。したがって、アオリストと異なり、刻々と伸展してゆく様子を一つ一つの局面において表すのである。典型例を下に引く。

А Новѣгородѣ зло бысть вельми: кадь ржи купляхуть по 10 гривень, а овса по 3 гривнѣ, а рѣпѣ возъ по 2 гривнѣ; ядяху люди сосновую кору и листь липовъ и мохъ. О, горѣ тогда братье, бѣше: дѣти свое даяхуть одѣренъ; 中略 О, горѣ бѣше: по търгу труписе, по улицамъ труписе, по полю труписе, не можасху пси изѣдати челоуѣкъ; (Новг. I лет., Синод. сп., л. 81 об.)

(一方、ノヴゴロドでは災いは甚だしかった。人々は、ライ麦大桶一杯 10 グリブナ、オート麦は 3 グリヴナ、蕪は荷車一台分で 2 グリヴナで買っているのだった。人々は松の樹皮、菩提樹の葉、そして苔を食べているのだった。ああ、諸君、この時は大きな悲運があるのだった。人々は自分の子供を残らず差し出しているのだった。... ああ、大きな悲運があるのだった。市場に死体が、往来に死体が、野原にも死体があつて、犬も人を食べつくすことができないでいるのだった。)

また、未完了過去は、上に示した意味から、過去において行われた動作に付随して存在した状況を描写できる。話し手の注意は、動作の過程そのものに集中されるのである。典型例を引こう。

послуша ихъ Игорь. иде в Дѣрева в дань. и примѣшляше къ первой дани и насилаше имъ. и мужи его. (Лавр. лет., л. 14 об.)

(イーゴリは彼らの言うことを聞き入れた。ドレヴリャニン族のもとへ貢物を取りに出かけた。そしてそこで従来の貢物に追加するのであった。また、ドレヴリャニン族に対して強制するのであった。イーゴリの家来たちも。)

アオリストによって過去において次々と生じた異なった動作が伝えられ、ストーリーが進行し、一方で、未完了過去がそれらに付随する状況を描くのである。

3-2. さて、このアオリストと未完了過去だが、現代ロシア語において、前者はほんの少し化石的痕跡を残すのみ、後者はまったく跡形も無い。この両者の消滅について、誤解を恐れずきわめて単純に述べると次のようになる。

まず最初に、12 世紀から未完了過去が、すでに日用語では支持を得ていない形として、失われ始める。ついで、アオリストも用いられなくなってくる。すでに 13 世紀の文献では、アオリストの誤った使用が見られる。

この変化は、動詞のアスペクト的な意味の拡大と関係する。アスペクト的な意味が二項の

対立の形を明らかにしてゆくにしたがって、アオリストと未完了過去は、その形成に制約を受けるようになった。一方、いわゆる完了は（古ロシア語におけるこの時制形式の実際の意味に関する議論は、しばらく措くとして）、-мъ に終わる能動過去分詞がアスペクト的対立の両項どちらからも形成されうる利点を活かして、唯一の過去形としてアオリストと未完了過去を退けていった。

上の図式は、古ロシア語には最初は4つの過去形があったが、そのうちのシンセティクな過去形である、アオリストと未完了過去とが完了によって駆逐されて、やがて、完了に由来する形式が唯一の過去形となる、というものである。

この図式に対して、未完了過去やアオリストの用いられ方の分析を通して、異論を唱える研究者もいる²³。

まず、伝統的な考え方を引く。

未完了過去は教会関係の文献、年代記（両者の中間のような翻訳されたゲオルギオス・ハマルトーロス年代記のようなもの）、『イーゴリ遠征物語』で用いられている。一方、未完了過去は、最も古い時期の証文（*грамота*）や最古の写本以来の『ロシア法典』にも見つけられない。これは、日用語を最も反映している文献では用いられていないということだが、それは、証文はふつうその内容からして未完了過去を使用するに十分なきっかけを与えないことからでも説明がつく。

しかし、最古の諸年代記における乱れの無い未完了過去の使用は、『原初年代記』の原典が作られた時期では、未完了過去がおそらくさかんな形態であったことを物語っている。よって、未完了過去の消失は、少なくとも、12世紀の初頭以降に生じたのである。

アオリストは、より長く保たれた。すでに未完了過去を持たない文献にでも見出すことができる。しかし、やはりかなり早くから無くなり始めた。最古期のオリジナルの諸文献に過去形として完了しか出てこないものが有ったとしても、それが直ちにアオリストが日用語で失われていたことの証明にはならない。なぜなら、そこでの完了の用法は古くからの意味に照らして正しいものと認められているからだ。しかし、1229年のスモレンスクの証文（大きな分量のものである）は、明らかに日用語では未完了過去とアオリストが失われていることを証明している。なお、アオリストの消失は、地方によって早い遅いの差が有った。スモレンスクのような西の地方では、おそらく、13世紀にはすでに無くなっていた。一方、ノヴゴロドのような北の地方ではより遅くまで用いられていた²⁴。

3-3. このような定説に対し、Горшкова と Хабургаев は、次のように反論する。

伝統的な説は、文章語における確固とした文法伝統の見地からのみ、一方通行的に、日用語と文章語の関係を考えているのである。対話体と叙述体（これには確固とした文法伝統を

持つ宗教文献のみならず業務文も含まれる) との間の、様々な時制の意味に対する需要の差を全く考慮していない。また、時制形態と、それらが個々の具体的な文章の中で現すはずの、様々な意味との間の関係も考慮されてはいない。このように重要な諸要素を無視した結果、日用語における過去形の発達を図式を、仮説的にさえ、明確には描けないような食い違いが生ずるのである²⁵。

たとえば、ノヴゴロドの証文では、13 世紀、14 世紀でもアオリストが使われており、定説では、「消失の始まり」と考えているが、逆に、「古風の名残」であり当時の日用語の反映ではない、とも見なせるのである。

日用語における過去形の歴史の現実に即した解釈は、文献に基づくかぎり、宗教文献の伝統から最も自由な文献での頻度を考えるのみならず、過去形と、それによって個々の具体的な使用例において表された過去時制の意味との相互関係を考慮せねばならない。

最古期のあらゆる非文章語的文章での -мъ に終わる形態の使用の分析から、この形式は、本来の「完了」の意味のみならず、アオリストや未完了過去の意味でも用いられていたことが分かる。このことからさらに、12 世紀、13 世紀のスモレンスクやノヴゴロドの書き手たちは、その言語意識において、過去時制の様々な特別の意味を、完了体からも未完了体からも形成される -мъ に終わる形態と結び付けていたことが明らかにされる。同時に、ノヴゴロドの証文におけるより遅くまでのアオリストの使用に根拠を与えていた形は、実際は、けっしてアオリストの意味では用いられてはいなかったのである²⁶。

未完了過去に関しては、東スラヴ諸語に存在したことを示す肯定的な証拠はない。最古の諸年代記における乱れの無い未完了過去の使用に基づき、東スラヴの日用語でのその存在を主張する人もいる。しかし、逆に、最古の諸年代記における接尾辞 -(ы)ва- / -(и)ва- を伴った未完了過去の使用は、未完了過去の元来の意味がすでに失われていたので、接尾辞によって語彙的に補ったことの証拠となる²⁷。

それ専門の時制の意味を持ったアオリストも未完了過去も、12 世紀の東スラヴ族の日用語には、すでに存在しなかった。12 世紀の非文章語的文章ではアオリストの意味は常に、完了体から形成された -мъ に終わる形態で表されていた（まれに不完了体からの）。このような文章でのアオリストの形態は、読み書きできる人にアオリストの知識が有るということの証明にしかならず、また、正しい本来の意味での用例は一つも無いのである。古ロシア語の日用語における過去時制形としてのアオリストの存在（11 世紀より以前？）は、やはり疑うことはできない。けれども、未完了過去に関しては、たとえ文献以前のであれ東スラヴ語の体系に入っていたかは証明されえない。非文章語的文章における過去形の批判的な分析から、12 世紀より遅くない時期に、書き手の言語意識の中では、過去時制の様々な特別の意味が、完了体からも未完了体からも形成される -мъ に終わる形態と結び付けていたこと

が確認される。さらに、-ль に終わる形態は、быти の諸形態による助動詞を落とし（1人称、2人称では、時制ではなくて人称のために、まだ用いられた）、すでに現在（発話時）との結びつきを断って、過去時制本来の様々な意味を表せるようになった²⁸。

言語地理学の資料によっても、古代教会スラヴ語的な過去時制体系の、東スラヴの諸方言における再編過程の11世紀までの完了という結論は支持されている²⁹。

同様の議論は、Б. А. Успенский も展開している³⁰。

3-4. Хабургаев に対する、伝統的な立場からの反論を紹介する。

未完了過去は、その意味と用法の分析から、12世紀、13世紀の古代ロシア文語では叙述体の文章において、その特有の意味や、古代教会スラヴ語にも早い時期の古ロシア語の文章にも知られていた用法の規則性を保ちつつ、活発に用いられていたことが分かる。同時に、13世紀末までにはその用法の縮小傾向が跡付けられる。たとえば、13世紀の Лобковский пролог のような大部の叙述的文献でさえ、ウスペンスキー文書に含まれる12世紀の文献に比べて、未完了過去の用例は少数である。ただし、その機能は、いまだ、法則に合っている。

未完了過去における、たとえば叙想的な機能の発達、また、不完了体の意味とのアナロジー的結びつけは未完了過去という形が12世紀、13世紀の古ロシア語に元来から有ったこと、本質的であることを証明する。特定領域の文献における使用が限られる点は、具体的な特徴描写をする機能を持つ叙述的形態としての、未完了過去の基本的な伝達上の任務の特殊性にのみ起因する。

未完了過去は、日用語にも有った。А. А. Зализняк の指摘によれば、12世紀前半の白樺文書にも、未完了過去の使用例が見られる。第605号は修道士の手紙であり、未完了過去の使用は文章語の規範への書き手の意識的な志向と結びつくのかもしれない。しかし、第487号では、3回見られるが、日常的なものである。

このような文章における未完了過去の存在は、11世紀、12世紀初頭の日用語においてもそれが使われていたという伝統が生きており、さらには、その伝統が後に叙述的文章および教会関係の文章では保たれたが日用語においては失われてしまったということを証明するかもしれない。11世紀から13世紀の文章で出会う未完了過去の形に対して、それらを文章語的な叙述の印であって日用語の形態ではないと見なして、もっぱら文章語的、人為的な性格に帰するのは、きわめて断定的な見解だ³¹。

4 古代ロシア文語の萌芽期をめぐる研究の可能性

4-1. 古代ロシア文語の萌芽期における東スラヴ族とアオリストや未完了過去との関わりの問題に対して、どのようなアプローチが可能であろうか。

この時期、東スラヴ人にとってのアオリストと未完了過去の問題を考える資料としては、ごく僅かの文献しか残されていない。そもそも、この時期は文字で記された資料それ自体ごくごく限られたものなのだが、碑文や白樺文書は、残された点数からも、その内容からも、分量からも、考慮の対象外となる。残る資料は、福音書を始めとする教会関係の少数の文献のみである³²。

これらの文献は、古代ロシア文語の精華であり、写し手の規範意識も高い。したがって、その教会の書房の流儀のようなものが窺える程度で、写し手の方言があからさまに反映されることがなく、その文献を確実にある地域と結び付けることは難しい。しかしながら、局所的には個人の言語が反映されている箇所もある。そういう箇所は、古代教会スラヴ語研究の立場から、ルシズム (русизмы) と見なされている。東ブルガリアから入った古代教会スラヴ語がロシア教会の唯一の用語となったのだが、最初から土地の東スラヴ人の日用語の強い影響を受けて、急速に「ロシア化」したのだった³³。それゆえ、キエフ・ロシアの文献は、たとえ 1100 年以前のものであっても古代教会スラヴ語のカノン・テキストとは認められない習慣になっているのである。ルシズムは、古代教会スラヴ語の周辺的問題、あるいは、古代教会スラヴ語から見た古代ロシア文語との関係の問題であるので、ここで論じている問題にとっては補助的な研究材料だと思われる。

4-2. ここでは、仮のアプローチとして、(ルシズム以外の) テキストの異同に注目してみたい。具体例として、『アルハンゲリスク福音書』³⁴から若干の例を引いて、考え方の方向を示そう。

(1) ПРЪХОДА ІСЪ. ВИДЪ ЧЛКА МЫТАРА (ルカ V-27, Arkh, 50, 15³⁵)

(2) (И)ЗИДЕ И ОУЗЫРЪ МЫТАРЪ (Mar)

(3) ИЗИДЕ ІІС. И ОУЗЫРЪ МЪЗДОИМЪЦА (Ostr)

(4) ПРИКОСНОУВЫИ СѦ МЪНЪ НЪКТО НЕСТЬ (ルカ VIII 46, Arkh, 54v, 2)

(5) ПРИКОСНЖ СѦ МЪНЪ НЪКЪТО (Mar)

(6) ПРИКОСНЖ СѦ МЪНЪ НЪКЪТО (Ostr)

古代教会スラヴ語のカノン・テキスト (ここでは『マリア写本』) に対する『オストロミール福音書』の忠実さが分かる一方で、『アルハンゲリスク福音書』の異読が目立つ。このような異なった読みの箇所は、カノンからの逸脱と見なすべきなのだろうか。答えは否である。このような異読箇所は、けしてカノンからの逸脱ではないのである。その理由は、この

異読は『アルハンゲリスキ福音書』における「編集」的態度の現われの結果だからである³⁶。

たとえば、(1) に対しては、

(7) І ПРЪХОДА ИССЪ ОТЪ ТОУДЖ ВИДЪ ЧЛВ(К)А. (マタイ IX-9, Mar)
という並行箇所があり、それを用いて (1) の部分の本文を作ったと考えられる。(4) に対しては、

(8) КЪТО ЕСТЬ КОСНЖВЫ СА МЫНЪ. (ルカ VIII-45, Mar)
という箇所の利用である。カノン・テキストでも『アッセマーニ写本』、『サバの本』では、このルカ VIII-45 末尾で、まさに ПРИКОСНЖВЫ СА という形が出る。

このような、単なる機械的なコピーではない、「編集」的な写本作成態度はけして唐突なものではなく、1073 年の『スヴァトスラフの文集』でも見られる。また、『アルハンゲリスキ福音書』に少し遅れる『ムスチスラフ福音書』でも見られる³⁷。

(9) СЪБЪРАША НА НЪ ВСЮ СПИРОУ (マルコ XIV-16, Mst)

(10) ПРИЗЪВАША ВЪСЖ СПИРЖ (Mar)

この異読は、『マリア写本』の並行箇所、マタイ XXVII-27 の СЪБЪРАША НА НЪ ВЪСЖ СПИРЖ の利用である。ちなみに、『アルハンゲリスキ福音書』では、

(11) СЪЗЪВАША ВЪСЮ СПИРОУ (113v, 19)

というように、さらに工夫してある。

実は、ここは、『アッセマーニ写本』では ПРИЗЫВАЮЖТЬ となっており、カノン・テキスト内でも揺れがある。『アルハンゲリスキ福音書』における「編集」的態度は、まずそのような箇所から採用されていた。

4-3. このことは、本文をより分かりやすいものにしようとする意識が根底で働いていたことを示すのではないだろうか。いくつか具体的に検討しよう。

(12) И ВЪЗВАЛИВЪ КАМЕНЬ ВЕЛИКЪ. (マタイ XXVII-60, 120v, 15)

(13) І ВЪЗВАЛЬ КАМЕНЬ ВЕЛИИ (Mar)

であるが、カノン・テキストにある能動過去分詞の形を、-ВЪ で終わる形態の方がより分かりやすいと考えて書き直したのだろう。同様の例を引く。

(14) А СЪ НИЧТОЖЕ ЗЛА НЕ СЪТВОРИВЪ. (ルカ XXIII-41, 118v, 12)

(15) А СЪ НИЧЪСОЖЕ ЗЪЛА НЕ СЪТВОРИ. (Mar)

ここは、『アッセマーニ写本』では 2 回この章句が出るのだが、その一つで СЪТВОРЬ (105b) となっている。『アルハンゲリスキ福音書』の СЪТВОРИВЪ は、この能動過去分詞をより分かりやすい形に書き換えたものだ。

この方針がさらに進むと、分詞自体を動詞に書き換えることになる。

(16) СЪ ПРИСТО^ѸПРИСТОУПИ КЪ ПИЛАТОУ И ИСПРОСИ ТЪЛО (マタイ XXVII-58、120v, 9)

(17) СЪ ПРИСТЖПЪ КЪ ПИЛАТОУ ПРОСИ ТЪЛА (Mar)
ПРИСТЖПЪ という能動過去分詞を ПРИСТОУПИ というアオリストに書き直してしまった例である。同様の例を引く。

(18) СЛЫША ИРОДЪ Ц(С)РЬ. (マルコ VII-4、171v, 14)

(19) І ОУСЛЫШАВЪ ЦСРЬ ИРОДЪ (Mar)
『マリア写本』のルカ IX-7、СЛЫША ЖЕ ИРОДЪ あたりを見て、単純化したと思われる。

(20) И ПОСЛОУША НЕГО. (マルコ VI-20、172, 16)
『マリア写本』ПОСЛОУШАА、『アッセマーニ写本』ПОСЛОУШАВЪ あたりの揺れを気にしつつ、分かりやすくアオリストに直してしまったのだろう。

下の例は、2つ出てきた分詞と動詞1つを、分詞は1つだけ残して、もう一つを動詞に変えて、単純化した例。

(21) ОНА ЖЕ ПОКЛОНЫШИ СА НЕМОУ ГЛАШЕ. (マタイ XV-25、70v, 19)

(22) ОНА ЖЕ ПРИШЕДЫШИ ПОКЛОНИ СА ЕМОУ ГЛШТИ. (Mar)
ПРИШЕДЫШИ は削除して、ПОКЛОНИ СА を分詞化し、一方で、ГЛШТИ は未完了過去動詞とした。全体として分詞の数を減らしてシンプルな構文に直した。

4-4. このような手法のゆく先にあるものが、次のような例であろう。

(23) ШЬДЪ ПРОДАСТЬ ВСЕ ЇМЪНИЕ НЕЛИКО ИМЪ КОУПИ И (マタイ XIII-46、133, 1)

これは、他のテキストでは、ИМЪАШЕ (Mar) と未完了過去で出てくるところである。それを、おそらく、ЧКЪ ЕТЕРЪ ИМЪ ДЬВЪ ЧАД (マタイ XXI-28、Mar) あたりの表現を借りてその感覚で、書き換えたものだろう。

(24) ВЪРОВАША ВЪ НЪ (ヨハネ XII-37、12v, 11)
ここもふつうは、ВЪРОВААХЖ (Mar) と未完了過去である。

(25) ОНИ ЖЕ ВЪЗПИША. (ヨハネ XIX-15、128v, 10)

同じく、ВЪПИѢХЖ (Mar)と未完了過去の箇所である。もちろん、勝手にしたわけではなく、ОНИ ЖЕ ПАКЫ ВЪЗЫПИША (マルコ XIV-13, Mar)といった下敷きがあるわけである。

また、ロシアの写本における接頭辞へのこだわりというものも、同じ手法の延長線上にあるのかもしれない。たとえば、

(26) АЩЕ НЕ ИСПИЮ НЕЯ (マタイ XXVI-42, 96, 4)

の箇所は、ふつう ПИѢЖ (Mar) で、接頭辞を持つのは『アルハンゲリスキ福音書』、『ムスチスラフ福音書』、『ブウトナ福音書』³⁸などロシアの写本である。

(27) ВЕЧЕРЮ СЪТВАРААШЕ (マルコ VI-21, 172, 20)

(28) И ТЪ СЪВѢСТЬ ЯКО ИСТИНОУ ГЛѢТЬ (ヨハネ XIX-35, 120, 14)

いずれも、ТВОРѢАШЕ (Mar)、ВѢСТЬ (Mar)という形に比べて接頭辞への志向が見られる。

(29) АЗЪ ПОСЫЛАЮ КЪ ВАМЪ (マタイ XXIII-34, 125, 16)

では、『マリア写本』での СЪЛѢЖという形が標準だが、『ムスチスラフ福音書』では ПОСЫЛЮという形を出す。しかし、だからといって、これが直ちに体の形成の問題と結びつくわけではない。敢えて言えば、接頭辞の多用は、分かりやすさを志向したもので、また、それは同時に（東スラヴ族の）日用語の持ち味とも関係してくるのかもしれない。

さらに、以下のような例をどう考えるかである。

(30) ПИЛАТЪ ЖЕ ДИВИ СА. АЩЕ ОУЖЕ ОУМРЕ. И ПРИЗВАВЪ КЕНТОУРИОНА. ВЪПРОСИ НЕГО. АЩЕ ОУЖЕ ОУМЪРЛЬ НЕСТЬ. (マルコ XV-44, 112v, 4, 『マリア写本』では ОУМЪРѢТЬ)

(31) И ВЪРОВАША ЯКО ТЫ НЕСИ ПОСЫЛАЛЪ МА. (ヨハネ XVII-8, 16v, 15, 『マリア写本』では ПОСЫЛА)

(32) МѢСТА. ИДЕЖЕ ЛЕЖАЛЪ ГЪ (マタイ XXVIII-6, 121v, 15)

(33) МѢСТО. ИДЕЖЕ ЛЕЖА ХЪ (Mar)

(34) МѢСТО ИДЕ БѢ ПОЛОЖЕНЪ. (Mar, マルコ XVI-6)

上のような例から、次のような推測も成り立つ。すなわち、アオリストや未完了過去は、ギリシャ語と（地理的にも社会的にも）親しく接していたスラヴ人の言葉においてだけ能動的な存在であって、東スラヴ人の日用語には縁の無いものであり、その頃からずっと過去時制は -ЛЪ 分詞で表され、体も現代語とほとんど同じだった、ということである³⁹。こう考えることは大変に魅力的である。しかし、この考えは、現状では証明することは不可能であ

り、推測の域を出ない。

結び

古代ロシア文語萌芽期におけるアオリストと未完了過去の研究では、文献資料における異読箇所をどのように扱うかがポイントとなる。『アルハンゲリスク福音書』に見られるカノン・テキストとの異読箇所はけして規範からの逸脱ではない。それは写し手の「編集」的態度の現われである。その手法の一つの現われとしては、理解しにくい箇所（たとえば、カノン・テキストに揺れのあるような部分）を並行箇所の表現で分かりやすく書き換えるようなことが見られる。こういった手法の延長線上に、接頭辞を用いる傾向や動詞の（同じ動詞の、より分かりやすい形態への）置き換えがある。それらを東スラヴの日用語の言語意識がにじみ出したものと考えられるかどうか。もしそうだとすれば、東スラヴの日用語におけるアオリストや未完了過去の位置づけに何らかの光が当たるかもしれない。だが、そのためには、古代ロシア文語萌芽期の諸文献における単なる頻度ではなく、一つ一つの文脈における検討を踏まえた、用例分析の蓄積が、まだまだ必要とされている。

注

- ¹ たとえば、Иванов、339 ページ。
- ² 古代ロシア文語の概念については、本報告書論文 I を参照のこと。
- ³ 本報告書論文 I を参照。
- ⁴ Горшкова, Хабургаев、10 ページ。
- ⁵ К. В. Горшкова と Г. А. Хабургаев を踏まえたもの。同書、30～33 ページ。
- ⁶ Древнерусская грамматика XII - XIII вв. М., 1995. 4 ページ、など参照。
- ⁷ この問題について、今日の説の基礎を据えたと言われる、П. С. Кузнецов の考えによる。Очерки исторической морфологии русского языка. М., 1959. 参照。
- ⁸ Горшкова, Хабургаев、297 ページ以下。
- ⁹ Bermel、105 ページ、61 ページなど。
- ¹⁰ Кузнецов、173 ページ。
- ¹¹ 同書、185 ページなど。
- ¹² Горшкова, Хабургаев、298 ページ。
- ¹³ Маслов は、体のカテゴリーの基礎として、限界相：非限界相の対立を重視している。Силина は、1982 では、限界相：非限界相とともに限定相：非限定相もかなり重視していたが（163 ページ、164 ページ）、1995 年では、より Маслов に近い考えになっている。
- ¹⁴ общий вид
- ¹⁵ Роль так называемой перфективации и имперфективации в процессе возникновения славянского глагольного вида // Исследования по славянскому языкознанию. М., 1961. などの諸研究を見よ。
- ¹⁶ Ю. С. Маслов も参照。
- ¹⁷ このような記述を見れば、古ロシア語の「体」と現代語のそれを同列に論ずることがで

きないことが明白になる。

¹⁸ Ю. С. Маслов を見てもわかるように、これは動作様相のカテゴリーであるはずである。

¹⁹ このような動詞の占める割合はけして小さなものではなく、それを無視して、現代語に似せた、二項的な体の体系を考えることは矛盾がある。

²⁰ この点は、保守的である。

²¹ Древнерусская грамматика XII - XIII вв. М., 1995. 375 ページ以下参照。

²² Горшкова, Хабургаев, 319 ページ。

²³ 先鞭をつけたのは、А. И. Соболевский (1856 - 1929) であろう。

²⁴ たとえば、Кузнецов, 214 ページ以下。

²⁵ Горшкова, Хабургаев, 351 ページ。

²⁶ 同書, 352 ページ。

²⁷ 同書, 354 ページ。

²⁸ 同書, 358 ページ。

²⁹ 同書, 360 ページ。

³⁰ [Б. А. Успенский, 1988], 172 ページ以下。

³¹ Древнерусская грамматика XII - XIII вв. М., 1995. 441 ページ以下参照。

³² Дурново, Kiparsky など参照。

³³ 本報告論文 I 参照。また、[木村], 24 ページも。

³⁴ 現存するロシア最古の写本の一つ。このアプラコス (日曜祝日典礼用福音書抜粋) は、『オストロミール福音書』(1056 年~1057 年)、1073 年と 1076 年の二つの『スヴァトスラフの文集』に次ぐ第四の古さを誇る。詳しくは、[服部, 1999] 参照。

³⁵ Arkh は『アルハンゲリ스크福音書』の略。以下の数字は葉数と行数。Mar、Ostr はそれぞれ『マリア写本』、『オストロミール福音書』。写本の詳細は、[木村], 25 ページ以下。

³⁶ 『アルハンゲリ스크福音書』に見られる「編集」的態度については、[服部, 1998]、[服部, 1999] 参照のこと。

³⁷ 1117 年までには成立していた、「拡張型」のアプラコス。

³⁸ 13 世紀のロシアの写本。

³⁹ たとえば、Г. А. Хабургаев の Древнерусский и древнепольский глаголы в сравнении со старославянским: (К реконструкции праславянской системы претеритов) // Исследования по глаголу в славянских языках. История славянского глагола. М., 1991. などが参考になるかもしれない。

参考文献

Букачевич Н. И. и др. Историческая грамматика русского языка. Киев, 1974.

Винокур Г. О. Избранные работы по русскому языку. М., 1959.

Горшкова К. В., Хабургаев Г. А. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд., испр. М., 1997.

Древнерусская грамматика XII - XIII вв. М., 1995.

- Древнерусский литературный язык в его отношении к старославянскому. М., 1987.
- Дурново Н. Н. Введение в историю русского языка. Впо, 1927.
- Зализняк А. А. Древненовгородский диалект. М., 1995.
- Иванов В. В. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд., испр. и доп. М., 1983.
- Историческая грамматика русского языка: Морфология. Глагол. М., 1982.
- Ковалевская Е. Г. История русского литературного языка. 2-е изд., перераб. М., 1992.
- Колесов В. В. Динамика форм прошедшего времени в древнерусских памятниках // История русского языка. Древнерусский период. Проблемы исторического языкознания. Вып. 1. Л., 1976.
- Кузнецов П. С. Очерки исторической морфологии русского языка. М., 1959.
- Лаврентьевская летопись. Полное собрание русских летописей. Том первый. М., 1997.
- Литературный язык Древней Руси // Проблемы исторического языкознания. Вып. 3. Л., 1986.
- Маслов Ю. С. Роль так называемой перфективации и имперфективации в процессе возникновения славянского глагольного вида // Исследования по славянскому языкознанию. М., 1961.
- Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Полное собрание русских летописей. Том III. М., 2000.
- Обнорский С. П. Очерки по истории русского литературного языка старшего периода. М.; Л., 1946.
- Ремнева М. Л. История русского литературного языка. М., 1995.
- Темчин С. Ю. Установление направления правки в церковнославянском тексте: формы имперфекта в Остромировом евангелии // Актуальные проблемы современной русистики: Диахрония и синхрония. М., 1996.
- Толстой Н. И. История и структура славянских литературных языков. М., 1988.
- Толстой Н. И. Избранные труды, том II: Славянская литературно-языковая ситуация. М., 1998.
- Успенский Б. А. История русского литературного языка (XI - XVII вв.). Budapest, 1988.
- Успенский Б. А. Краткий очерк истории русского литературного языка (XI - XIX вв.). М., 1994.
- Устинов И. В. Очерки по русскому языку, ч. 1. М., 1959.
- Хабургаев Г. А. Старославянский церковнославянский русский литературный // История

русского языка в древнейшей период. М., 1984.

Bermel N. Context and the Lexicon in the Development of Russian Aspect. Berkeley, 1997.

Kiparsky V. Russische Historische Grammatik. Band I-II. Heidelberg, 1963-1967.

Vlasto A. P. A Linguistic History of Russia to the End of the Eighteenth Century. Oxford, 1988.

岩井 憲幸「古代教会スラブ語の地方的変種から古代ロシア文語の萌芽にかかわる研究 — 『アルハンゲリ스크福音書』を中心として — 」、平成9年度文部省科学研究費報告書、1998。

木村 彰一『古代教会スラブ語入門』、白水社、1985。

高津 春繁『印欧語比較文法』、岩波書店、1954。

H. モーザー『ドイツ語の歴史』、白水社、1967。

レーベチェフ編／除村吉太郎訳『ロシア年代記』、原書房、1979。

服部 文昭「『アルハンゲリ스크福音書』における古代ロシア文語の萌芽的要素について」京都大学「総合人間学部紀要」第5巻、pp. 25-44、1998。

服部 文昭「古代ロシア文語の統語論と語彙の資料としての『アルハンゲリ스크福音書』」創価大学「スラヴ東欧研究センター資料集」No. 6、pp. 20-25、1999。

古代ロシア文語萌芽期における動詞時制・アスペクト体系の研究

2001年3月31日 発行

著 者

服 部 文 昭

連 絡 先

京都市左京区吉田二本松町

京都大学総合人間学部

D号館423研究室

電話：075-753-6732

印刷・製作

明文舎印刷株式会社

電話：075-681-2741
